

報告

イギリスの EU 離脱/残留に関する聞き取り調査——国民投票 2016——¹

梅川佳子

The real Voices of British Citizens on the Referendum 2016

Yoshiko UMEKAWA

Britain held the EU referendum on 23 June 2016, and came into the process for leaving the European Union. I was in Coventry, UK, from April to August in 2016, as Visiting Fellow, at the School of Law, the University of Warwick. I often discussed the referendum with many citizens during and after the referendum.

My report is an inquiry into their feelings on it. However, it was not made through collecting random samples of their voices. This is the report of their real voices on the referendum. I have found their feelings in their ordinary lives, concerning the referendum, in my communication with my many friends in Coventry. This inquiry illuminates the actual feelings and opinions of the both sides of the referendum. It is impossible to find them through public opinion polls. This is the reason why my report is important.

Key words: EU referendum, Brexit, interview survey

はじめに

本報告は、2016 年 6 月 23 日にイギリスで行われた EU 離脱/残留をめぐる国民投票に関して、私がイギリスの人々と生活をともしながら彼らが自然と語ってくれた内容の一面を切り取ったものです。2016 年 4 月から 8 月末までイギリスのウォリック（Warwick）大学で在外研究を行っていた私は、国民投票前後の人々の様子を肌で感じる機会を得ました。

私が接した人々は、政治家でも官僚でもなく、経済界の有力者でもありませんでした。イギリスの田舎の小さな大学町に暮らす、やや裕福な人たちです。彼らは、政治活動に関与しているわけでもありませんし、市民運動に積極的なわけでもありません。EU 離脱/残留に関して、自分の意見を公表する機会を持つこともなければ、自らの意見を広く発信したいとも思わない人たちです。

¹本報告は、豊秋奨学会および中部大学（特別研究費・AⅡ）による研究助成を受けた成果の一部であり、ここに感謝申し上げます。

しかし、そのような人たちの何らかのそれぞれの決断が、国民投票の結果を引き出したことは確かなことです。その決断の内容は、事前の世論調査などでは正確につかむことはできませんでした。だから、ほとんどの調査予測は、はずれたのでしょう。そこで私は、イギリスに暮らす人たちが国民投票について実際にどのような気持ちを抱いていたのかを知りたいと考え、聞き取りを行いました。

EU 離脱/残留については、これまでに多くの世論調査が行われていますが、統計の数字からは、実際の人々が何を感じ、どのように考えて行動したのかを知ることは困難でしょう。EU 離脱に投票した人々の多くは、移民排斥を支持し、EU 諸国を見捨てたエゴイストであるとする非難もありました。しかし、人々の意見を数に還元した統計からは、例えば離脱に投票した人々が抱えていた迷いや葛藤までは知ることはできません。

本報告は、EU 離脱/残留をめぐる国民投票に関するイギリスの人々の生の声を記録したものです。話し手によって、心を開いてくれる時も場所も異なります。同一の条件下で行った聞き取りではありませんので、一人一人の発言を科学的に比較することには限界があります。しかし、私がイギリスで人々に助けられながら半年近く生活する中で、彼らがふと口にしてくれた思いもあったのではないかと考えています。

私は、イングランドの中心部に位置するウェスト・ミッドランド地方の中のコベントリー (Coventry) という町に住みました。ウェスト・ミッドランド地方は、かつて自動車産業で栄えた歴史を持ち、イングランドの中では平均的には労働者階級の多い地域です。しかし、私が生活したコベントリーの中心部は、大学関係者などの中産階級が比較的多い豊かな場所でした。

私は、19 世紀に建てられた美しいレンガ造りの家が並ぶ町で、民家の一室を借りて生活しました。コベントリーでは、古い町並みだけでなく、そこに暮らす人々の長年のコミュニティも保存されているようでした。中国系やインド系の移民を見かけることはありましたが、全体としてイギリス生まれのイングランド人 (イングリッシュ) が住人の多数を占めていました。

日々の会話の中では、自然と EU 離脱/残留をめぐる国民投票が話題となりました。イギリスでは、一般の人々が日常生活の中で政治について話し合う機会は、日本よりも多いように感じました。しかし、とりわけ国民投票に関しては、自分の気持ちを他人に率直に語ることは、少なくともこれから述べる私の体験からすれば、けっして当たり前のことではありませんでした。

私は国民投票の一週間ほど前に、近隣に住む 60 代のイギリス人男性、マーチン・ライアン (仮名：以下同様) と、近所の公民館のような場所で開かれる茶話会に参加しました。30 人ほどが集まった茶話会では、イングリッシュが多数を占めていました。話題の中心は国民投票でした。人々は「一週間後に私たちは決断しなければなりません」と話すものの、離脱と残留のどちらを支持するかという具体的な話には発展しませんでした。

不思議に思った私は、マーチンの友人であった同じく 60 代くらいの男性に国民投票についてどう思うか聞いてみました。その男性は、穏やかな表情で「難しい問題ですね」と言いました。その言葉の意味をさらに聞いてもよいものかどうかためらう私に、彼はふたたび同じ言葉を繰り返しました。彼は、自らが残留派か離脱派かははっきりとは言いませんでした。私には、彼の心の中ではすでに結論が出ているように思えました。

その男性が自らの意見を明白には話さなかった理由が、茶話会からの帰り道にマーチンと近所を歩いていたときに分かったような気がしました。マーチンは、通り沿いの家の窓を指さして私に次のように言いました。

あの家の窓にはポスターが貼ってあります。イギリスの EU 残留を支持するポスターです。このように自分の意見を主張するのは、最近では珍しくなりました。国民投票が話題になった初期のころは、みんなでお互いの考えを話し合っていました。しかし今では、国民投票についての意見は、みんな言いたがらなくなりました。よりプライベートなものになり、心の中の問題になってしまいました。

家の窓には、下の写真のように、赤いポスターに“Vote Remain 23 June”と書かれていました。その後、近所を歩き回って探してみたところ、離脱派のポスターは見かけませんでしたが、



他には二軒のみ、残留派のポスターを窓に貼った家がありました。たしかに、少なくともポスターを使って近隣の人たちに自分の意見を表明する人は少ないようでした。さらにマーチンが示唆したのは、茶話会に来ていた人たちも、私が質問した男性も、国民投票の問題を私的な問題として認識するようになったため、自分の立場をあまり他人に話そうとしなかったということです。

私は、国民投票が「プライベートな心の中の問題になった」というマーチンの言葉の意味を、人々と交流する中でより一層痛感するようになりました。国民投票直後に、私は、それまでに何度か話したことのあった 50 代のイングリッシュの女性に、国民投票についての意見を聞きました。青い目に金髪の彼女は、一瞬戸惑いの表情を浮かべました。その後、私をまっすぐに見て、静かに力強く言いました。「あなたには話せません」という一言でした。彼女が、私にだけ話せなかったのか、私以外の人にも話せなかったのか、今となっては分かりません。しかし、彼女にとっての国民投票は、簡単には口に出すことのできない問題であり、心の奥底で秘匿しなければならないものであるという思いがあったのでしょう。

とりわけ後に述べるように、イギリスの EU 離脱を支持して投票した人は、普段から仲の良い友人や同じ職場の人たちにすら、自分が離脱派であることを話したがりませんでした。当時のイギリスでは、離脱派は、EU 諸国から流入する移民を嫌う人種差別主義者であると思われる傾向がありました。そのため、離脱に投票したことが友人に知られることを、周囲から見ていて気の毒なほどに神経質に恐れる人もいました²。

また、離脱に投票した人の中には、残留に投票した友人との信頼関係を優先して、自分の思

² たとえば、本稿の(2)「離脱派の意見」における、④ローズ・バートン、⑦サマンサ・ロウズ、⑧サンドラ・アンダーソンなどの事例があげられます。

いを隠して、残留派であるかのようにふるまう人もいました。EU 離脱/残留をめぐる国民投票は、私が出会った人々にとって、彼らの信条を問うような実存的な問題であり、それまでの人間関係を破壊するほどの危険なものになることもありました。

それでも、離脱に投票した私の友人や知人の多くは、私に自分の思いを話してくれました。彼らは、他人のいない静かな場所や、他の人に自分の意見を知られない方法を選んで、じつに慎重に自らの心情を語ってくれました。とはいえ彼らは、胸の内にあるエゴイズムや差別意識や宗教的信条を隠して、私に無難な意見や表面的な見解を述べたのかもしれませんが。

聞き手である私は日本人であり、彼らがそのことを配慮して意見を述べた可能性もあります。それでもなお、彼らが時間を割いて、私に対して、ときに人目をはばかって密かに語ってくれた内容は、国民投票に関する彼らの決断の背景の一部を示す意味をもつものだと思います。

私がコベントリーで2016年6月末から7月にかけて聞き取りをした人の数は、合計して21人で、そのうちEU 残留派が12人（投票権所有者は10人）、離脱派が9人（全員投票権所有者）でした。コベントリー全体では、国民投票の結果は、残留派が44.4%、離脱派が55.6%でした。イギリス全体の国民投票の結果は、残留派が48.1%、離脱派が51.9%でした。

この世論調査と、私が実際に行った聞き取りの結果は、偶然、似通ったものになりました。しかし、実際には私の周囲では、残留派が圧倒的に多くいました。私は意識的に離脱派の人を探した面もあり、結果的な人数の意味については慎重に扱う必要があると考えています。

私の周囲で残留派が多かった理由の一つは、私が聞き取りをした対象が、基本的には大学町のホワイトカラーを含む比較的裕福な中産階級の人々であることにもあります。私を受け入れてくれた町の人々や大学関係者は、教養があり、アジア人をはじめとする外国系の人に対して寛容な態度をもっていました。

彼らの意見は、多くの労働者を含むコベントリーの町の人々の声を代表しているわけでもありませんし、イギリスの人々全体の意見を象徴しているわけでもありません。しかし、私が対面して聞くことのできた人々の実際の声が、EU 離脱/残留をめぐる人々の思いの一端を示唆していることもまた事実です。イギリスとEU 諸国の今後の関係については、いまだに流動的で不確定な状態です。こうした状況において、イギリスの将来を考える際に、彼らの実際の気持ちを知ることは、必要なことであると思います。

本報告では、私が聞き取りをする相手である話し手が、どのような人物であり、どのような見解を持っていたかということそれ自体が重要であると考えするため、まずは各人の発言をそのまま書いていきます。

その際、私の質問や相槌は省いています。話し手の名前は、実際の名前ではなく仮名です。相手によって、私が知りえた情報の量は異なりますし、回答の長さもばらつきがあります。私は、あくまでも現地の人々との信頼関係を作る中で、聞き取りをすることを重視し、話し手の関心になるべく素直に出るように配慮しました。そこで、通常の世論調査のように、調査する側があらかじめ選択肢を詳細に準備したうえでの調査とは、異なったものになっています。

以下では、話し手の発言を残留派と離脱派ごとに紹介したうえで、私自身の見解について述べたいと思います。

(1) 残留派の意見

① ヒュー・ウイルソン³（イギリス市民・ドイツ出身・60代・男性・翻訳家）

私はドイツに19年間（1983-2002）住んでいました。私はいつも、イギリスがEUと密接に結びついていると考えてきました。さらに、翻訳家としての仕事上、私は経済的洞察力を持っているため、私はイギリスがEUを離脱した場合に私たちが困難な結果に直面するだろうと思っています。これはすでに起こっていることです。EUを離脱した場合、イギリスは今よりももっとアメリカに頼らざるをえなくなりますが、これは悲しいことだと思います⁴。

私は、主権の問題が重要な問題だとは思っていません。私は、ウェストミンスターで行われる決定が、ブリュッセルで行われる決定よりも政治的により賢いものになるだろうと信じる理由はないと思います。孤立主義は、イギリスにとって決して良くないと思います。

イギリスは、他のヨーロッパ諸国からの移民によって大変豊かなものになっていると感じています。他のヨーロッパ人に対してドアを閉ざすことは、良くないシグナルを発することになります。悲しいことに、EU離脱以降、イギリスでは排外主義的な行動も増えてきました。イギリスにおける移民の割合は、実際にはドイツよりもずっと低いのが現状です。

国民投票の少し前に、ベルリンにおけるイギリス人の翻訳家の会合で調査が行われ、その結果、200人の翻訳家の中で二人だけがEU離脱を支持していることが分かりました。

② スー・ウイルソン（イギリス市民・イギリス出身・50代・女性・小学校教師）

私はEU離脱には絶対に反対でした。すべてのトップの経済学者たちは、離脱への反対を表明しているように思われました。私はドイツに住んだことがあるため、私たちはEUの多くの利点を知っていました。私は国際的な人たちと接するのが好きです。イギリスに来て住むEU市民は、イギリスに大変良いものをもたらしています。

私は、国民投票が必然的だったとは思いません。経済的な知識のない人たちに根本的に経済的な問題について投票することを求めるのは、馬鹿げていると思います。悲しいことに、キャンペーンは良くありませんでした。多くの人たちは、移民が好きで

³ 氏名はすべて仮の名前です。

⁴ 話し手の発話内容については、段をおとして、記載しています。

はないから離脱に投票しました。彼らの多くは、十分な教育を受けていない人たちであり、EU 離脱によって最も多くのものを失う人たちでした。

政治家たちは、適切な情報を与えるよりも、EU に留まることがいかにおそろしいかを私たちに教えることにより関心を持っていました。彼らは、移民を強調しすぎていたと思います。事実よりも、感情に基づいていました。その結果、EU 離脱で何を進めていくのかについての計画が何もなかったことが明らかになりました——これはイラク戦争を思い起こさせます。政治家は移民を減らせるとか、自由市場にはアクセスできるといった、多くの馬鹿げた約束をしました。

③ ルース・マッケンジー（イギリス在住ドイツ市民・ドイツ出身・20代女性・大学生）

イギリスの政治家たちは、EU についての視野の狭い見解を示していました。EU は、労働者の権利、平和と和解、共同プロジェクトの基金の配分などにとって、非常に重要です。イギリスの人々の見解もまた、狭いものだったと思います。人々は、自分たちが今持っているものよりも、もっと多くのものを持って当然だと思いがちでしたし、誰かが、あるいは何かが、常に自分たちから奪っていると思いがちでした。〔キャンペーンでは：梅川〕 経済に強い力点が置かれていましたが、経済は人々に幸福をもたらすわけではありません。

国民投票前は、キャンペーンはそれほど重要ではないと思っていました。しかし、私はキャンペーンが人の心を傷つけるものであるということを知りました。それは、私の義理の親が、私の夫〔ドイツ出身のイギリス市民：梅川〕に離脱に投票するように説得しようとしたときでした。夫は、もともと残留派でした。義理の親は、その影響力を分かっています。どちらに投票するかということがいかに個人的な問題であるかも理解していません。

国民投票のキャンペーンは、政治的運動に焦点を置き、「主権」について主張していました。しかし、完全な主権を要求するなら、最後は北朝鮮のようになってしまうでしょう。

④ レベッカ・メイソン（イギリス市民・イギリス出身・40代・女性・中学校教師）

私は、自分たちだけでやっていくよりも、他の諸国と協力する方が良いと思います。人々が EU 離脱を選んだ多くの理由は、EU のメンバーシップとは実際には関係がなかったと思います。たとえば、EU が私たちに課している法や規制の多くは、実際にはイギリス由来のものです。私たちが EU の一部ではなくなったとしても、イギリス政府は私たちにそのような規制を課してくるだろうと思います。

もう一つの例は、移民です。EU を離脱することは、人々が思っているほどには、移民の状況を実際に変えるわけではないと思います。イギリスにおける移民のうち、

わずかな割合が、EU 諸国の人たちから構成されています。それに、移民の多くは国の経済にとって重要です。

私はイギリスにおいて、誰にとっても、今こそ共に協力することが重要だと感じています。私たちは、これまでよりも、もっとお互いの意見に耳を傾ける必要があります。私は、EU からの移民によって被害を受ける人たちの存在について知りました。また、移民が彼らの仕事にとって何を意味するのかを知りました。私たちは、一部の人の生活ではなく、すべての人の生活を改善するために互いに協力する必要があります。

⑤ ジョン・マクミラン（イギリス市民・イギリス出身・70代・男性）とクレア・マクミラン（イギリス市民・イギリス出身・40代・女性・ペンキ塗り）

ジョンは、「離脱派は、排外主義に基づいています」と話し、残留を支持していました。ジョンの娘クレアは「私にはアフリカ系の友人がいたので、EU 残留に投票しました」と述べていました。

⑥ サンジェ・マコーレイ（イギリス在住インド市民・20代・男性・大学院生）

サンジェはインド市民でしたが、インドはイギリスのコモンウェルスであるため、イギリス在住者には投票権があり、サンジェも今回の国民投票で投票する権利を持っていました。投票結果が報じられた当日、彼はホームメイトたちに次のように話していました。

離脱派が勝ちましたが、この投票日は悲しい日です。もっと悲しいのは、人々がナイジェル・ファラージュ（Nigel Farage）〔離脱派の政党であるイギリス独立党の党首：梅川〕に投票することを選んだということを知ることです。今後、イギリスへの入国審査が厳しくなるのではないのでしょうか。

⑦ ヘーゼル・スティーヴン（イギリス市民・イギリス出身・60代・女性）

国民投票の結果をきいたとき、ショックを受けました。とても悲しかったです。私はイギリスに生まれました。私たちは、ずっと EU の一部でした。私は、ドイツに友人がいます。私はイタリアにもよく行きます。EU 離脱によって、今後ヨーロッパに行くのに許可が必要になるのは困ります。

⑧ バラカト・ハイマン（イギリス市民・東アフリカのエリトリアからの難民・20代・男性）

私は難民としてイギリスに来て、20年住んでいます。移民問題が、今回の国民投票

の争点でした。人々が愛国心や人種差別主義に基づいて投票したことがショックでした。若者の一人として、イギリスが EU の一部であってほしかったと思います。EU の一部であることによって、イギリスは利益を得てきましたし、ドイツなどの EU 諸国もイギリスから利益を得てきました。離脱がイギリス経済に悪影響を与えることを懸念しています。もし EU 諸国に行くのにビザが必要になれば、面倒だと感じています。

⑨ マンディ・ハウウェル（イギリス市民・イギリス出身・40代・女性・大学事務員）

私は、イギリスが他の国々と共にあってほしいし、他の国々のパートナーであってほしいと思います。EU は、ヨーロッパが再び戦争することを阻止するために作られました。しかし、EU 離脱は戦争へのドアを開いてしまいます。イギリスは、島国だからこそオープンでなければなりません。

国民投票後は、私はショックを受け、怒りがわきました。離脱派の政治家のメッセージは不明確でした。人々が離脱に投票した主な理由は、移民を阻止することでした。移民は、全体の問題の小さな一部にすぎません。私たちは、人種差別主義と闘わなければなりません。

⑩ アリソン・ピム（イギリス市民・ニュージーランド出身・50代・女性・医者）

イギリスはヨーロッパの一部であるべきだと思います。EU には、官僚制などの問題もありますが、ヨーロッパの一部であることには利益があります。NHS などの医療サービスは、今やヨーロッパのスタッフなしでは運営できません。

残留派の政治家も離脱派の政治家も、正直ではないと思いました。多くの人は、政府に失望し、政府への抗議を示すために離脱に投票しました。私の夫は、いつもは投票しますが、残留に投票すればキャメロン首相を支持することになるため、今回は投票しませんでした。しかし、私は残留に投票しました。

たしかに離脱派がでてくることにも理由はあるでしょう。たとえばキャメロンの政策は、うまくいきませんでした。豊かな人はより豊かになり、多くの貧しい人は仕事を失いました。政府の政策は、豊かな人を支援し、貧しい人たちを罰する結果になりました。イギリスの貧困層は、とくに東ヨーロッパからの移民に仕事を奪われると感じたのででしょう。

医療関係の同僚は、ほとんどが残留派でしたが、一人だけ離脱派でした。その人が離脱に投票した理由は、EU の不透明性にあったそうです。

⑪ アリス・ピゴット（イギリス市民・イタリア出身・30代・女性・大学研究員）

たしかに EU は完璧ではありませんが、私は、ヨーロッパの統合のプロジェクトを支持していました。家族や友人に、一人も離脱派の人はいませんでした。自分がいかに他の社会から切り離されているかを知りました。イギリスが分断された社会であることを知りました。

メディアの問題もあります。移民問題は、人々の心を外から圧迫し榨づけるものでした。移民の危機といっても、いつの時代にも移民はどこにでもいます。移民問題は政治化されてしまっています。

離脱派のキャンペーンは、人種差別主義に基づいていました。私は、このような国に住みたくないし、このような国を誇りに思いません。私はイギリス市民ですが、イギリスから外にでて働く機会があれば、イギリスを出ていくと思います。今のイギリスの政治的社会的雰囲気は、家族を持ち子供を育てるのに良くありません。イギリスに来て働いている人々を罰するような国に住みたくありません。

国民投票の結果をみると、イギリス人の半数が、イギリスの社会的経済的病理の原因は外国人にあると考えたのだらうと思われます。しかし、イギリスにおけるイギリス人とは誰なのでしょう。イギリスに住んで学び、イギリス社会に貢献する人は、イギリス社会の一員ではないのでしょうか。

⑫ ジャック・チャーマース（チリ市民・30代・男性・大学客員研究員）

キャメロン首相は、保守党の中で権力をとるために国民投票を行いました。結果的に憲法危機を引き起こしました。

国民投票の中心的問題は、移民問題でした。離脱派のキャンペーンは、外国人にとって友好的ではありませんでした。国民投票の結果を知ったとき、とても驚き、がっかりしました。私は、7年以上イギリスに住んでいます。今回の国民投票で、とても嫌な気分になりました。これは、グローバル化に逆行する決断でした。

（2）離脱派の意見

① ゴフ・ファイナー（イギリス市民・イギリス出身・60代・男性）

大英帝国が偉大になった理由は、イギリスの法と憲法が、聖書すなわち十戒とイエス・キリストの教えに基づいていたからでした。大英帝国は、明白にキリスト教の国（Christian country）でした。神が人間に「自由な意思」を与えたから、イギリスでは民主的な統治が生まれました。ブリュッセルと EU は、民主的ではなく専制的です。

私が離脱に投票した理由は、キリスト教の原理（Christian principles）に基づいています。EU は、真のキリスト教徒を差別しており、無神論的な課題を推し進めています。

イギリス政府は、国を統治する理念として、今こそキリスト教 (Christianity) を守るべきです。

すべての移民と難民は、キリスト教の価値にしたがって生きるよう教えられるべきです。そうしてはじめて、彼らは私たちの平和な社会に貢献するだろうと思います。もし私たちが、彼らに彼らの出身国での生活と同じ生活をするのを認めるならば、イギリスは急速に悪くなっていくだろうと思います。もしそうなれば、もうここに住む価値はありません。私たちの社会を混乱させる人々、たとえばテロリストは、追放されるべきです。

もともと、EU の創設目的は、経済的な発展ではなく、超国家をつくることでした。EU は、加盟国の主権をはく奪してしまいます。現在は、EU は経済的利益のために存在するという宣伝が行われていますが、これは、超国家の形成という真実を人びとから隠すための宣伝にすぎません。

② マーチン・ライアン (イギリス市民・イギリス出身・60代・男性)

マーチンは、特定の宗派に属するわけではなく、複数の教会を好きな時に訪れる、エキセントリックな人でした。国民投票に関しては、彼は EU 離脱を支持していました。彼は以下のように述べていますが、そこでは自らの信仰については一切示してはいません。しかし普段の彼の生活からすれば、下記の彼の発言の根底には宗教的な信念があったと思われます。

離脱に投票した理由は、デモクラシーの問題です。キャメロン首相は、EU に対して反感を持つロンドンの外部の有権者の存在に気づいていませんでした。イギリス政府は、ヨーロッパ市民に対して、ヨーロッパ以外の国々に適用されている移民のルールと同様のルールを導入すべきです。ヨーロッパ市民は、日本人と同じように扱われるべきであり、特権をもつべきではありません。イギリス政府は、ヨーロッパに対して税金を支払うのをやめるべきです。

③ アリソン・ドナルドスン (イギリス市民・イギリス出身・40代・女性・主婦)

投票前、どちらに投票しようか迷い、困惑していました。私は、[離脱派が問題にしていた：梅川] 年金について考えたくありませんでした。また、自分が何を得るのかを考えたくありませんでした。むしろ、国にとって、世界の人々にとって、良いことは何かを考えたいと思いました。世界の貧困の観点や、貿易ができないアフリカの国々の視点から考えると、EU 内部でイギリスが有利な立場にあることは、EU 外部の人々に不利益を与えていることを意味しています。

私は、投票結果を知ったとき、ショックでした。まだショックを受け、困惑しています。私は、EU 離脱に関する分析や予測を見逃していました。離脱に投票したことを後

悔しています。離脱の代償を恐れているのです。

④ ローズ・バートン（イギリス市民・イギリス出身・50代・女性・大学事務員）

ローズは、大学の事務員でした。彼女のオフィスの向かいの部屋で同じく事務仕事をしていたマンディは、残留派でした。私がマンディに離脱派の意見を聞きたいと述べたので、マンディはローズの部屋に行き、マンディは「私のまわりは残留派ばかりですが、あなたは離脱派の人を誰か知っていますか」とローズに問いかけました。しかし、ローズは「私は知りません」と答えました。

後日、私がローズと二人で会ったときに、彼女は恐縮した顔で私に次のように言いました。「ごめんなさい。この前は嘘をつきました。なぜなら、マンディが離脱派の人に対して怒っていたからです。」ローズは、彼女自身が離脱派だったにもかかわらず、マンディの前で自分が残留派であるかのような態度をしたのです。マンディは、離脱派が人種差別主義者であると考え、軽蔑していました。ローズは、職場での自分の立場を守るために、そしてマンディとの人間関係を円満に保つために、自分の意見を懸命に隠したのです。

ローズは、別の日に話をしてくれました。その日は、ローズのオフィスのある階に、珍しく他に誰も事務員がいませんでした。彼女は、誰にも自分の意見が聞かれずに細心の注意をはらってその日を選んだのだと、私は思いました。彼女は次のように私に語りました。

イギリスは、EUからの規制なしで、自分たちで決められるようになるべきです。EUの透明性は十分ではありません。EU議会のメンバーは、権力を乱用しています。EU議会の議員がどのようなことをしているのか、私は知りません。EUは権力を独占しようとしています。EUの見解は、ドイツとフランスのツートップの国の意見です。

過去数十年で、イギリスの人々はEUに関して多くのことで苛立ってきました。多くのことがEUで決定されています。何らかの変化がもたらされるべきであり、何かが行われるべきでした。国民投票によって、私たちは自分たちの意見を表明する機会を得ました。

私は、ファラージュらに説得されたわけではありませんでした。彼らは、移民を切り札として使っただけでした。彼らは、人種差別主義者でもあります。もっとバランスをとるべきです。

国民投票の前に、私は政治家の意見に耳を傾けましたが、私は、彼らが今後何が起こるかを知っているとは思いませんでした。しかし、EUに留まれば物事が良くなるわけでもないと思いました。

離脱が決定した後は、私は興奮しました。国が失った力を、そしてコントロールやすべてを、イギリスが取り戻す機会だと思いました。たしかにイギリスは、地理的にはヨーロッパの一部であり、私たちは共通性を持っています。しかしイギリスは、EUに戻るべきではありません。EUに戻った場合に、イギリスがギリシャのような状況になる

のではないかと心配しています。ギリシャは、EU 内に残留しても、貧しいままではありませんか。

私は国民投票の結果を知って、嬉しく思いました。しかし残留に投票した人々は、とても怒っていました。残留派は、離脱派が人種差別主義者だと思っています。私は、残留派が離脱派に対して持っている感情を恐れています。私は、離脱に投票したことを他人に言えません。残留派に何と言われるかを想像するところからです。ツイッターでも、離脱に投票した人は馬鹿だと書かれています。私の夫の友達で離脱に投票した人は、自身のフェイスブックが炎上し、閉鎖するまでに追い込まれました。

しかし、もう離脱は決まったのだから、変化を推し進めるべきです。国内でお金を効率的に使うべきです。私たちは、忍耐を基礎として、貿易協定をアメリカやオーストラリアやニュージーランドやインドと結ぶべきです。ある程度は EU とともにやっていかなければなりません。数年は経済にとって打撃もあると思いますが、離脱によってポジティブな事も起きるはずです。

⑤ タスニーム・ウォルカー（イギリス市民・イギリス出身・50代・女性・大学事務員）

この国は、人が多すぎる状態になってきていると思います。サービスやインフラは混乱しています。

私は、国民投票の結果については予想していませんでした。残留派が勝ったら、それを受け入れようと思っていました。結果的に離脱に投票しなければならなかったことは、悲しいことでした。イギリスを前に進めるために影響を与える方法が、国民投票しかありませんでした。

私は、イギリスの田舎にある小さな村で育ちました。今はハイストリートを通り抜けると、車ばかりで渋滞しています。イギリスは、10年や15年前とは、まったく異なる国になってしまいました。アメリカ人だろうとオーストラリア人だろうとアフリカ人だろうと、移民がどこから来たかは問題ではありません。

しかし、人が多すぎます。適切な人口と、正しい資格が必要です。私のような50代の世代のイギリス人は、ヨーロッパはヨーロッパだと考えます。海を隔てたヨーロッパは遠いと感じるのです。若い人はどうか知りませんが。窓の外には境界線があり、海を越えたところは別世界だと感じています。

⑥ ブレンダ・リデル（イギリス市民・イギリス出身・50代・女性・大学事務員）

私が離脱に投票した理由は、次の三点です。第一は、財政的理由です。離脱によって、イギリスが財政的能力を取り戻すことができます。第二に、移民は減らされるべきであり、移民システムが見直されるべきだと思いました。第三に、イギリスが自分たちに責任をとるための絶好の機会だと思いました。多くのことを、イギリス内部で自分たちで

コントロールできるようになると思いました。

しかし私自身は、離脱を予想していなかったので、国民投票の結果を知って非常にショックを受けました。しかし今は、私たちの気持ちを表明する機会だったと思っています。とはいえ、これから何が起こるか、制裁を受けるのか、このようなことを考えるとおそろしいです。しだいに人々のパニックは収まってきたように思います。私は、国をよい方向に進めていきたいと考えます。民主主義を受け入れるのなら、今回の投票結果を受け入れるべきです。

⑦ サマンサ・ロウズ（イギリス市民・イギリス出身・20代・女性・語学学校教師）

サマンサは、私〔聞き手：梅川〕が、最初に国民投票について聞いたときには「政治には興味がありません」と答えました。それは、彼女の友人もいる場でした。しかし、その後、私に対してメールで、すなわち彼女の友人には聞かれない状態において、次のように答えくれました。

国民投票について、どちらに投票すべきか、分かりませんでした。EUに留まるべき多くの理由もありましたが、他方でEUを離脱すべき多くの理由もありました。多くの人々は、EUを離脱した場合に何が起こるか分からないから、EU残留に投票したと思います。しかしEUに留まったからといって、何が起こるか分からないだろうと思います。

上記のメールには、彼女が残留と離脱のどちらに投票したのか、はっきりと書かれていません。どちらを支持しているのか分からないような書き方がされている理由は、彼女が離脱派だからだと私は考えています。彼女の友人のほとんどは残留派であり、彼女は自分の意見を言うにくかったのだろうと私は考えています。

⑧ サンドラ・アンダーソン（イギリス市民・50代・マシューの母）

サマンサの夫であるマシュー（イギリス市民・イギリス出身・20代・男性・エンジニア）にも、国民投票について聞きました。今度国民投票について意見を聞かせてほしいと言ったところ、彼は「面白そうですね、いいですよ」と快諾しました。しかし彼は、その後、メールを通じて、彼自身ではなく次のような彼の母親サンドラの意見を私に伝えてくれました。

どちらに投票すべきか、よく分かりませんでした。多くの情報が誇張されていると感じました。残留派のキャンペーンは、残留の利点について伝えるのではなく、非常にネガティブで、そのほとんどが離脱した場合に起きるおそろしいことについてでした。私にとって、〔離脱に投票した：梅川〕決定的な要因は、EU内部におけるデモクラシーの

欠如でした。私は、EU よりもイギリス政府の方が私を代表していると感じています。

ここで引用されている、マシューの母親の意見とされている内容でも、離脱と残留のどちらに投票したのか明記されていませんが、文脈から離脱に投票したように思われます。マシューも、サマンサと同じく離脱派である可能性があります。しかし自分の意見を私に話しにくかったため、母親の意見に託して自分の意見を述べたのでしょう。マシューは、彼自身が離脱派であることが周囲に知られることを、非常に警戒していることがわかります。

⑨ タクシーの運転手（イギリス市民・イギリス出身・50代・男性）

私〔聞き手：梅川〕は、コベントリーでタクシーに乗ったとき、運転手に国民投票についてききました。コベントリーでは、タクシーの運転手の職業にインド系の移民が参加してきており、イングリッシュである運転手は自分の職業が奪われるという危機感をもっていました。

このタクシー運転手は、「私が離脱に投票した理由は、プライドです。イングリッシュのタクシーの運転手は、全員、離脱派です。」と熱弁をふるいました。彼は、あまりに興奮して、メーターをあげるのを忘れていたほどでした。

おわりに

国民投票が行われた直後、メディアでは、とりわけ経済的問題が投票結果を左右したと報じられていました。高齢で低所得のイングリッシュは、イギリスがEU から離脱することによって彼らの年金のための資金がイギリスに戻ってくることを期待したと言われていました。

しかし、聞き取りをして意外だったことは、経済的な問題についてふれた人はほとんどいなかったということです。ゴフやマーチンなどの高齢の離脱派は、むしろ宗教的な問題に関心がありました。タクシー運転手の場合も、彼が最初に口に出した言葉は経済ではなくプライドでした。イングリッシュが自分たちをどのような存在として理解すればよいのかというアイデンティティの問題の方が、人々の関心として強いように感じました。

EU 離脱/残留をめぐるイギリスの国民投票の結果は、メディアにとっても知識人にとっても予想外のものでした。投票前には、結果は五分五分か、あるいはわずかに残留派が上回るだろうと予測されていました。私は、その予測が外れた理由の一つが、この聞き取りを通じて分かるような気がしました。一言でいえば、イギリスにおける知識人階級が、一般の人々の奥底で広まっている気持ちを十分には理解できていなかったことが、原因の一つといえるのではないかと思います。

私は、国民投票の後で、大学の先生に離脱派の知人がいないかきいてみました。しかし、彼のまわりには誰一人として離脱派の人はいないという返事でした。大学の研究員をしていたアリスによれば、彼女自身と彼女の周りの人々が全員残留を支持しており、大学関係者がいかに

狭い世界に住み社会から乖離しているかを痛感したそうです。

私は2016年4月にイギリスに滞在してから、ウォリック大学の研究者と接する中で、最初イギリスがEUに残留してほしいと思っていました。残留派の意見は、科学的データや学者の見解をふまえたものが多く、私にとって親しみやすく、安心感のあるものでした。

ところが、私が聞き取りを続けていくうちに相手の話により引き込まれたのは、私自身の予想に反して離脱派の方でした。残留派の意見は、いわば教科書的で利己心や情念を感じさせないものでした。それに対して離脱派の意見は、その人自身のそれまでの体験や実感をふまえた、その人なりの言葉をつかったものでした。

離脱派の意見は、科学的根拠は薄いものの、その人の気持ちが語られているように思われ、言葉に力があり、聞き手である私に何か忘れられないような印象を残しました。とくにゴフのいうキリスト教を根拠にした議論には、強い迫力を感じました。宗教的理由を示した人はあまりいませんでしたが、この議論はキリスト教が社会に深く根付いているイギリスにおいて一定程度の普遍性を持っているかもしれないと感じました。

移民の問題に関していえば、残留派のヒューやスーやルースは、移民の存在がイギリスを豊かにしていると考えました。さらにヒューは、イギリスにおける移民の割合はドイツにおけるそれよりはるかに低いとも述べて、イギリスにおける数少ない移民を排斥しようとすることは理解できないと述べています。

それに対して離脱派のタスニームは、ここ30年の実感としてイギリスでは移民の流入により人々が増えすぎており、その変化にインフラ整備が追いついていないと話し、移民規制の必要性を訴えています。離脱派にとって、イギリスで移民の増加により生活が様変わりしているという危機感は、イギリスにおける移民の割合がヨーロッパ諸国と比べて低いという議論をしても、消えることはないでしょう。移民の存在が豊かな文化の創出に貢献することは、もっともなことであるとしても、裏をかえせば、そのことによって、実はイングリッシュが社会の周辺に追いやられていくという離脱派の恐怖感は、むしろ増大するのかもしれません。

このような離脱派の実感や感情は、残留派の人たちには十分には伝わっていなかったように思われます。聞き取りを通して、離脱派と残留派の相互の認識のズレも見えてきました。残留派の中には、離脱派が人種差別主義者であると考え、離脱派を嘲笑するような態度をとる人もいました。ところが実際に離脱派の人に話を聞いてみると、移民に対する明確な差別的発言をした人はいませんでした。

もちろん、彼らが差別意識を隠していた可能性はありますが、その場合にも差別を口にしないという心理的なブレーキを彼らが持っていたといえます。たとえば大学事務員のブレンダは、移民規制の必要性を主張しましたが、その理由は特定の人種を差別しているからではなく「どこの国の出身者であるかにかかわらず、とにかく人が増えすぎている」からでした。また興味深いことに、離脱派の人の中で残留派の人たちを嘲笑する人はいませんでした。

さらに言えば、離脱派の認識では、イングリッシュは差別する側ではなく、むしろ差別される側でした。ゴフによれば、EUは「無神論的な課題を推し進めることで、イギリスのキリスト教徒を差別している」のです。離脱派の選択は、積極的に移民を差別するためではなく、差

別される側としての自己防衛だったといえるかもしれません。

また、残留派と離脱派は、相手の意見に対する態度も異なります。残留派は、自分たちの意見の正しさに自信をもっている場合が多くありました。彼らの多くに欠けていたのは、相手である離脱派の意見を深刻に考えて、それを通過したのちに決断するという態度でした。

それに対して離脱派の人たちの態度は、残留派の意見を恐れているという意味で、相手の意見を自己の内部で知りながら、それを否定するという傾向があったように思われます。もちろん、これは地域的な特徴あるいは階層的な特徴かもしれません。しかし、少なくとも私が面接した人たちの間では、このような特徴がありました。

もし、知性が、自分と対立する意見を理解する能力であるとするならば、一見知性的ではない離脱派の態度が実は知性的であるというアイロニーを感じることができます。